

## H26年秋期の堅果類等の豊凶とツキノワグマの出没予測（H26年10月3日）

中山間地域研究センター

### 1. 目撃、捕獲の状況

例年に比べて、クマの目撃件数（被害、痕跡、捕獲件数を含む）は6、7月に多かった。一方、捕獲数は5月から9月まで継続して多かった。5月は錯誤捕獲が多く、6月は牧場の飼料等への被害、7月はニホンミツバチの蜜蝋への被害、8月は早生クリやキャンプ場での生ゴミへの被害、9月はクリ園や青いカキ等への被害発生が多くて有害捕獲が増加した（図1）。

6、7月の出没が多かったのは、堅果類が豊作だった2012年度の冬期に生まれた多数の子が1歳となって、母親と別れて新たな生息地を求めて分散したことによるとも考えられるが、山菜等（サクラ、タケノコなど）の餌となる植物が不足していた可能性もある。

また、8月の出没が多かったのは、長雨などによって、餌となるハチやアリなどの昆虫類の発生が少なかったことが影響したとも考えられる。

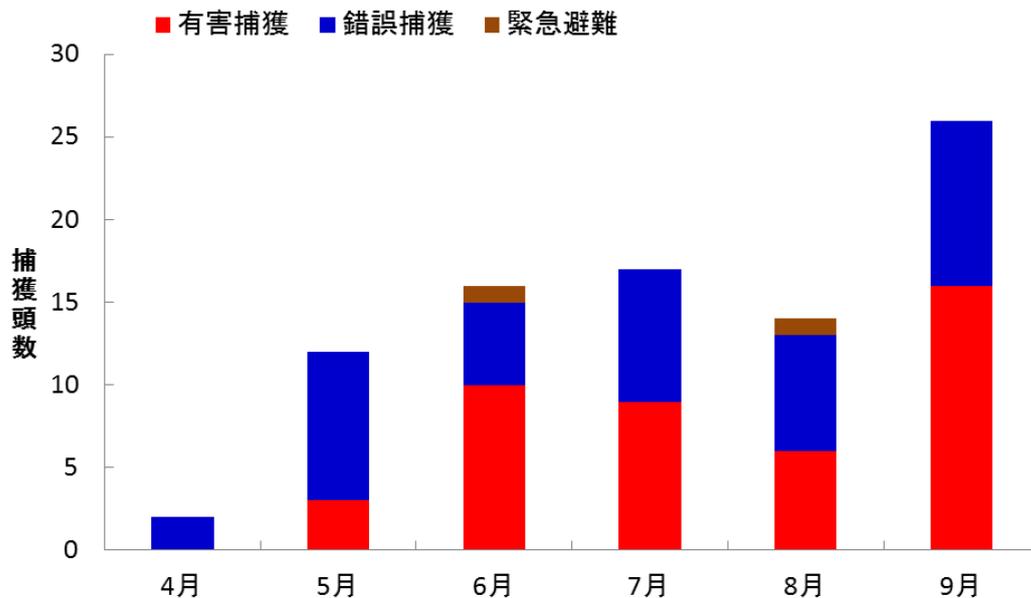


図1 2014年4～8月の捕獲区分別の捕獲頭数

### 2. 堅果類等の豊凶の状況

クマノミズキ：凶作

シバグリ：豊作

コナラ：並作

ミズナラ：並作

ブナ：凶作

アラカシ（西部地域）：並作

### 3. 今後の出沒予測

クマノミズキなどが少なかったために9月20日頃まではクリ園や青いカキなどへの被害発生は多かったと考えられるが、その後はシバグリが実ったことなどから被害発生はほとんどなくなった。今後もコナラ、ミズナラなどが実ると予想されるので、平成22年秋期のような人里への大量出沒や被害発生にはならないと考える。

ただし、集落内で放棄されたカキの果実などは、毎年クマを誘引する要因となっているため、伐採やトタンまき等の防除によってクマを人里へ誘引しないように努めることが必要である。

なお、今後、当センターでは春期からの捕獲個体の年齢（放獣個体も含む）、胃内容物、栄養状態などを調べて、出沒要因を検討する予定である。